



小栗式ビジュアル・ラーニング・メソッド

# ザ・英文法

イラストでわかる英語の仕組み

Third Edition - Blue

サンプル版

小栗 聡

iaxs vancouver  
(アイアクセス・バンクーバー)

「えっ、ウソ、そうだったの」と目からウロコの種あかし  
頭の中で英語を描く新感覚学習メソッド！  
英語は [ 簡単 → わかる → 楽しい ] という学習サイクル

## サンプル1

### 名詞の基本用法 : There is some apple in the salad. はごく自然な英文!

名詞に関して英語が日本語と決定的に違う点は、名詞を可算(数えられるもの)として扱うか、不可算(数えられないもの)として扱うかの区別があることです。日本語の概念にはこの区別が明確に存在しないので、日本人学習者にとって数えられる・数えられないという区別を意識しなければならないことが英語を厄介にさせている理由の1つかもしれません。

学校英語では、可算名詞と不可算名詞を説明するとき「普通」「物質」「抽象」「集合」「固有」名詞という仕分けをしますが、これだと私も含め多くの学習者は混乱し、実のところ何もわからないのが現状ではないでしょうか。なぜなら、具体的な普通名詞は数えられる、抽象的な抽象名詞と物質名詞は数えられないという説明では「apple は普通名詞だから数えられる」となり、

There is some **apple** in the salad.

という英文を見たときに当惑してしまいます。

また「surprise は抽象名詞だから数えられない」となり、

I have a **surprise** for you.

という文を見るとやはり当惑してしまいます。

辞書をひと目見ればわかると思いますが、大多数の名詞が可算にも不可算にも使われます。ならば、可算名詞と不可算名詞の区別を学校や参考書で習った通りに考えるのではなく、もっと個々の名詞をイメージで捉えるようにすれば、このような当惑もなくなるはずです。

もちろん可算と不可算の区別が明確にない日本語を母語にする我々にとって名詞はちょっと厄介なものですが、名詞をイメージで捉えるようにすれば、そんなに難しい区別ではないと思いますよ。名詞をイメージで捉えるとはどういうことかと言うと「頭の中で名詞を具体的な形やイメージに描くことができれば数えられる名詞、描くことができなければ数えられない名詞」という至ってシンプルな判断基準です。

次の例文で実際にこのイメージをつかんでみましょう。例文中にある太字の名詞を頭の中で描いてみてください。どんなイメージ図になりますか？

- 1) a. I had **an apple** this morning. (今朝、リンゴを食べました)  
b. There is some **apple** in the salad. (サラダにリンゴが入っています)
  
- 2) a. We have **a rabbit** as a pet. (ウサギを飼っています)  
b. I had **rabbit** at a French restaurant. (フレンチレストランでウサギの肉を食べた)
  
- 3) a. Could I have **a beer**, please? (ビールを1杯ください)  
b. We had a lot of **beer** at the party last night. (パーティーでビールを大量に飲んだ)
  
- 4) a. John broke **a glass** last night. (ジョンがグラスを割った)  
b. **Glass** is made from sand. (ガラスは砂から作られる)
  
- 5) a. The trip to Canada last year was **an unforgettable experience**.  
(去年のカナダ旅行は忘れられない経験になった)  
b. We learn from **experience**. (我々は経験から学ぶ)
  
- 6) a. I found **a few grey hairs** this morning. (数本の白髪を見つけた)  
b. Did you have your **hair** cut? (髪をカットしてもらったの?)
  
- 7) a. I have **a surprise** for you. (君にびっくりする知らせ [贈り物] がありますよ)  
b. She looked up in **surprise** as I walked in. (入っていくと彼女は驚いて顔を上げた)

1)~7)の例文はすべて a. が可算、b. が不可算です。

頭の中で具体的な形やイメージを描くことができましたか？

「頭の中で名詞を具体的な形やイメージに描くことができれば数えられる名詞、描くことができなければ数えられない名詞」という至ってシンプルな判断基準でしたね！

では、実際に前述の例文のイメージを確認してみましょう。

1)

a. I had **an apple** this morning. (今朝、リンゴを食べました)

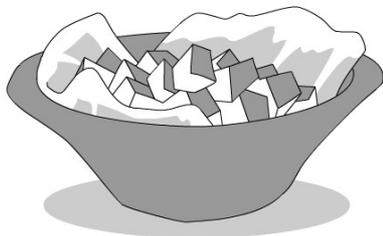
「球形をした果物のリンゴ」→ 頭の中で球形をした具体的なリンゴの形を描けますね。



この球形の具体的なリンゴの形が頭の中で描けたら  
an apple になるのです。

b. There is some **apple** in the salad. (サラダにリンゴが入っています)

「サラダに入っているのは具体的なリンゴの形を失った果肉のリンゴ」→ 頭の中で具体的な球形のリンゴの形を描けませんね。



サラダの中に入っている小刻みにカットされたリンゴは具体的なリンゴの形を失っていますよね。このように具体的な球形のリンゴの形が描けないリンゴは some apple になるのです。

There are some **apples** in the salad. (X) としてしまうと、サラダの中に上の a. のような球形のリンゴがいくつも入ってしまいますよ。

## サンプル2

### that は who / which の代用ではない！

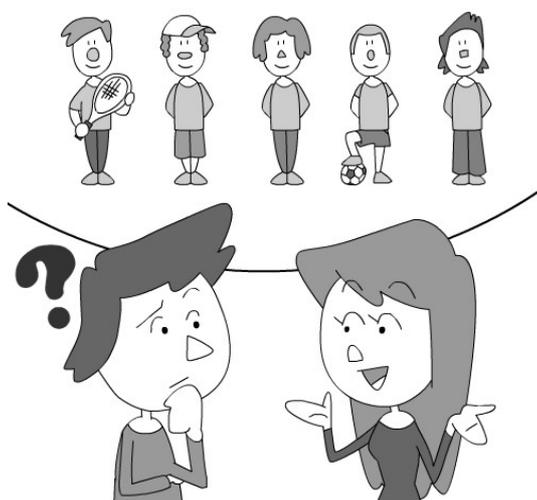
関係代名詞 that は who / which の代わりに使うことができ、両者の間にはあまり意味的違いがないと説明している参考書が一般的ですが、CGEL(Huddleston and Pullum)では両者は異なる関係代名詞であるとはっきり述べています。

つまり、関係代名詞 who / which と that では働き(意味)が違うということです。

では、両者の違いを見てみましょう。

who / which はもともと疑問詞です。この who「誰」 which「どれ」という基本イメージが関係代名詞 who / which の基本イメージだと考えてみてください。

The boy **who** is wearing a baseball cap is my son.



The boy...と聞いたとき、聞き手は「誰？」と思いますよね。イラスト図のように、いきなり「その男の子」と言われても、男の子が何人もいるから、聞き手には「どの子」を指しているのかわかりませんね。

だから、話し手は The boy who...を使って「その男の子、誰かと言うと…」のように男の子を who が指示語として受け、誰を示すのかを埋めていくような働きをします。

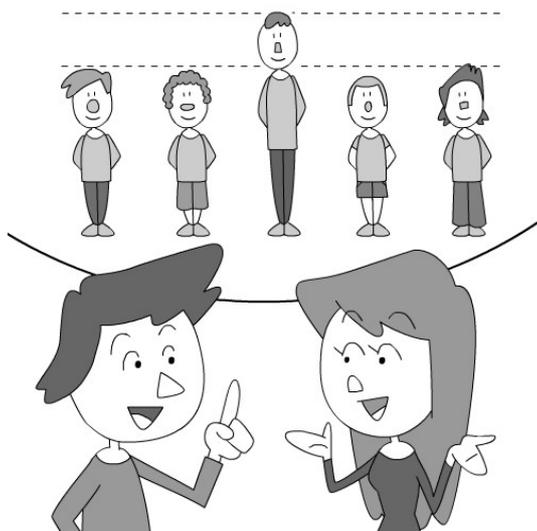
実際「その男の子、誰かと言うと、野球帽をかぶっている男の子」と言われれば、どの男の子のことを指しているか聞き手にはわかりますね。男の子は何人もいますが、ここでは野球帽をかぶっている男の子を指すわけです。

このユニットの最初で言及したような学校英語で習う関係代名詞の一般的な和訳だと「野球帽をかぶっている男の子が私の息子です」となり、和訳に who が現れません。関係代名詞 who を理解するためにも和訳を「男の子、誰かと言うと…」のように前から訳し、関係代名詞 who をきちんと訳すと関係代名詞の本質がよりよくわかりますよ。

これに対して、関係代名詞 that はもともとの「それ」「あれ」という指示代名詞のイメージで考えればよいのです。つまり「その…」「あの…」と that の関係代名詞節の内容を指し示すことができるときに用いるのです。また who や which のように「誰かと言うと…」「どれかと言うと…」など聞き手に具体的に特定してあげなくとも、聞き手は先行詞が「どの人」か「どのモノ」なのかイメージできるのも関係代名詞 that の特徴です。

He is the tallest boy **that** I've ever had in my class.

(彼は一番背が高い男の子です。私が受け持った中でね)



イラスト図のように、the tallest boy... と聞いたとき、聞き手はまずその男の子が具体的にわかるはずですが、一番背の高い男の子と言われれば、わかりますね。だから who... を使って「どの子かと言うと…」のように「男の子」を特定する必要はありません。さらに、彼が一番背が高い男の子(the tallest boy)と言われたら、聞き手には that 以下の内容が想像できそうですね。

例えば、友人の先生との会話を想像してみてください。友人の先生が生徒の田中君のことを「彼は一番背が高い男の子…」と言った場合、それに続く内容が想像できませんか。先生が生徒のことを「あの子一番背が高い男の子なのよ」と言えば、おそらく「受け持った中で」「学校の中で」または「クラスの中で」のような内容がおおよそ想像できますよね。このように関係代名詞 that を使うときは、先行詞や文脈から that 以下の内容が聞き手にわかる(想像できる)のです。



小栗式ビジュアル・ラーニング・メソッド

# ザ・英文法

イラストでわかる英語の仕組み

Third Edition - Purple

サンプル版

小栗 聡

iaxs vancouver  
(アイアクセス・バンクーバー)

「えっ、ウソ、そうだったの」と目からウロコの種あかし  
頭の中で英語を描く新感覚学習メソッド！  
英語は [簡単 → わかる → 楽しい] という学習サイクル

## サンプル1

### listen to vs. listen for

次の英文の空所に入る適切な前置詞は？

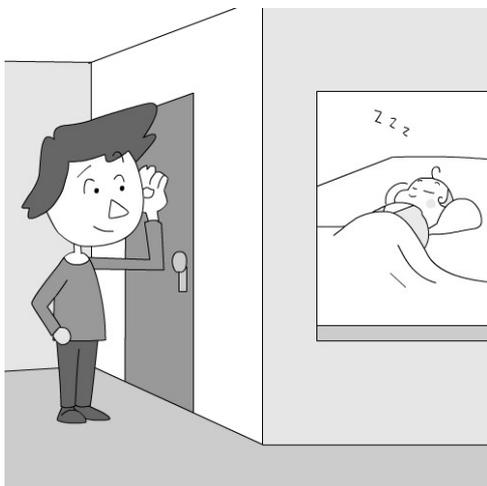
I listened (        ) sounds from the baby's room, but it was quiet. [ to / for ]

listen を見て、機械的に to を入れませんでしたか？ listen to を句動詞で覚えてしまうと、やはり英語の本質的な部分は見えてきません。前置詞にはそれぞれきちんとした働きがあります。そして、それぞれの前置詞は意味を持って使われていることを忘れないようにしましょう。

for の基本イメージは「方向のみ」、そして to の基本イメージは「方向+到達」でしたね。

He listened **to** the music.

「彼は音楽を聞いた」という意味。もちろん、ミュージックが流れていたから「聞いた」という意味になるのです。つまり、彼の耳(聴覚)はミュージックの音に「到達」しているという意味です。もしミュージックが鳴っていなければ、耳(聴覚)はその音に到達しません。He listened **to** the music. は前述の He went **to** school. 「彼は学校に向かい、そして学校に到達した」と同じ発想なのです。彼の耳はミュージックに向かい、そのミュージックに到達しています。音に「到達」しているという基本イメージから listen to となるのです。



したがって、例文の空所に to を入れると後半の「部屋は静かだった」という部分と矛盾してしまいます。

部屋が静かだったということは、赤ちゃんはぐっすり寝ていたのです。つまり、部屋から赤ちゃんの泣き声は聞こえてこないのだから、当然、耳は音に「到達」していません。だから、空所には for が入るのです。

I listened **for** sounds from the baby's room, but it was quiet.

耳(聴覚)は赤ちゃんに「向いている」が、赤ちゃんの泣き声(音)には「到達」していない。つまり「赤ちゃんが泣くことを予想して耳をすましている」という意味になるのです。

このように前置詞に焦点を合わせると、listen to や listen for の to や for がきちんと意味を持って使われていることがわかりますね。丸暗記主義はやめて、前置詞の意味をきちんと理解することで句動詞と言われているようなものもぐっと身近になりますよ。

次に聴覚を視覚に転用した文を考えてみましょう。

I'm looking **for** my wallet. (財布を探している)

目(意識)は財布に向いているが、まだ財布は見つかっていませんね。つまり、まだ財布に到達していない。ここに for の持つ「到達していない」というイメージがあるのです。

for の基本イメージと to の基本イメージがわかると、どうして動詞 buy は for を取り、動詞 give は to を取るのかイメージでわかるようになります。

He bought Karen some flowers. → He bought some flowers **for** Karen. (1)

He gave Karen some flowers. → He gave some flowers **to** Karen. (2)

buy, book, find, make など for を用いる動詞のグループと give, offer, hand, send, show など to を用いる動詞のグループをおそらく理屈抜きに覚えたのではないのでしょうか。

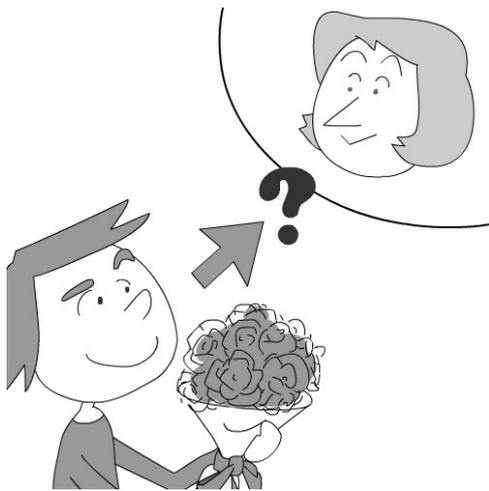
しかし、理屈抜きの丸暗記をしなくとも、前置詞の基本イメージと「三者関係」を理解すれば、どちらを用いるか容易にわかるようになります。

for 「方向」のみを示し到達の意味を含まない。

to 「方向」 + 「到達」の意味まで含む。

前置詞の主語と目的語、そしてそれをつなぐ前置詞 for と to の基本イメージを考えればいいだけです。

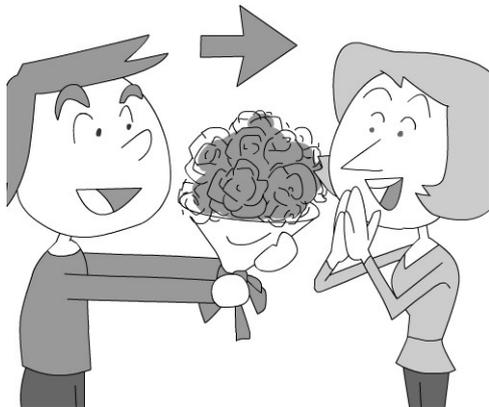
1) He bought some flowers → for --- Karen.



イラスト図のように buy という動作の段階では some flowers はまだ Karen に到達しませんね。もちろん Karen にあげるために花を買っているのだから flowers の方向は Karen に向いています。でも、もしかしたら浮気者の彼は気が変わって Michelle に花をあげたかもしれませんよ。つまり buy という動作の結果ではまだ some flowers は Karen に到達しないのです。

だから「方向のみ」の for が使われるのです。

2) He gave some flowers → to → Karen.



イラスト図のように give という動作の結果、some flowers は Karen に到達します。あなたが誰かに花をあげるという行為をすれば、その花は相手に届きますよね。だから give という動作の結果、前置詞の主語 some flowers は目的語 Karen に到達します。

だから「方向+到達」の to が使われるのです。

## サンプル2

### 関係代名詞と分詞の相違点

名詞の後ろに置かれた分詞は、動詞に近い働きをすることから関係代名詞節に近い働きをしますが、両者は異なります。日本語には関係代名詞そのものがないので関係代名詞の文と分詞の文を日本語に訳すと違いがわかりません。だから、両者の違いをイメージで理解しましょう。

では、次の2文を比較してみましょう。

- 1) Can you see the man **running** over there?
- 2) Can you see the man **who is running** over there?



1) の分詞の文はイラスト図のように、走っている男性を指しています。つまり、走っている男性しかいないので関係代名詞でわざわざ相手に who(誰かと言うと) と特定する必要がない場面なのです。分詞はその男性のことを特定するのではなく、男性についてより多くの情報を付け足しているだけです。



それに対して、2) の関係代名詞の文は、イラスト図のように、走っている男性以外にも男性が何人かいるので「走っている男性」と特定しないと相手かどの男性のことかわからないような場面で用いられるのです。

同じように和訳される両者ですが、イメージが全く異なることがわかりますね。

関係代名詞の文と分詞の文を日本語に訳すと違いがわからないと前述しましたが、どうして和訳では両者の違いがわからないのでしょうか？

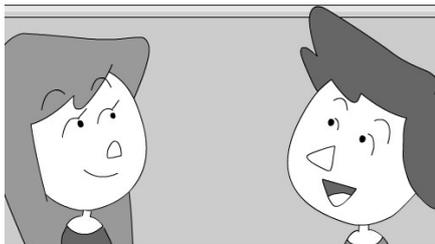
その理由は、前から理解する英語に対し、日本語は後ろから訳す言語だからです。

もう一度、前ページのイラストを見てみましょう。

1) Can you see the man **running** over there?



日本語で「向こうで走っている男性…」と後ろから訳しても、向こう側には男性が1人しかいないので、あなたは男性を自動的に特定できます。



では、前から理解する英語はどうでしょうか。英語は「あなたは見えますか、その男性…」と前から理解しますが、やはり向こう側には男性が1人しかいないので前から理解しても、あなたは男性を特定できます。

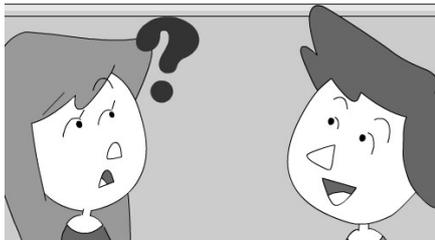
したがって、このイラストでは後ろから訳す日本語でも、前から理解する英語でも問題なく聞き手は男性を特定できます。では、次のイラストはどうでしょうか？

2) Can you see the man **who is running** over there?



後ろから訳す日本語から考えてみましょう。

「向こうで走っている男性…」と言われ、ここで文が終わっても、あなたはその男性を特定できますね。



向こうには複数の男性がいますが「走っている」と言われた瞬間に、あなたは話し手がどの男性を指しているのかわかりますね。

しかし、前から理解する英語はどうでしょうか？

「あなたは見えますか、その男性…」



もし文がここで終わったら、あなたは話し手が向こう側にいるどの男性を話題にしているかわかりますか？

向こう側には男性が複数いるから「その男性」と言われてもどの男性のことかわかりませんよね。だから、英語では関係代名詞 who を使って「誰かと言うと、向こうで走っている」と聞き手にどの男性を話し手が話題にしているのかを特定してあげるのです。

このように日本語は後ろから訳すので、向こう側に男性が1人でも、複数いても聞き手には話し手がどの男性を取り上げているのか理解できます。だから日本語には関係代名詞が不要なのです(日本語には関係代名詞そのものがない)。

しかし、英語は前から理解する言語だから、複数の人の中から特定の人を指す場合は関係代名詞が必要となるのです。

英語と日本語は180度異なる言語です。やはり和訳に頼らず英語の基本イメージで両者の違いを理解する方がわかりやすいでしょう。



小栗式ビジュアル・ラーニング・メソッド

# ザ・英文法

イラストでわかる英語の仕組み

Third Edition - Green

サンプル版

小栗 聡

iaxs vancouver  
(アイアクセス・バンクーバー)

「えっ、ウソ、そうだったの」と目からウロコの種あかし  
頭の中で英語を描く新感覚学習メソッド！  
英語は [ 簡単 → わかる → 楽しい ] という学習サイクル

## サンプル1

**完了形：I have lost my keys. → I don't have my keys now.**

現在完了形とは？

現在完了はおそらく多くの英語学習者が最も悩まされる英文法の1つでしょう。その原因は学校英語で習った和訳を仲介させると、過去のことなのか現在のことなのかよくわからなくなるからです。だから、日本語をなるべく介さずに、英語の時制は事柄が時間軸上のどこで起きるのかを常に意識することが重要でしたね。

現在完了を時制という側面から説明すると、その字の如く、過去ではなく「現在」に属します。これは話し手の意識はあくまでも時間軸上の現在、つまり「発話時」にあるということです。ただ話題にしている動作(状態)が終了しているので「完了」という言葉がつくのです。

PEU(Swan)では、現在完了はほとんど一種の現在時制に等しく、現在完了の文を作る場合、同じ状況に対してふつう現在時制の文を作ることができると説明しています。

**I've broken my leg.** → **My leg is broken now.**

(足が骨折している)

**I have lost my keys.** → **I don't have my keys now.**

(カギは今ありません)

**Have you read the Bible?** → **Do you know the Bible?**

(聖書の内容を知っていますか)

**I have traveled in Europe a lot.** → **I know Europe well.**

(ヨーロッパのことはよく知っている)

例えば、

**I have lost my keys.**

学校英語では「カギをなくしてしまった」と訳すと思いますが、実際には「カギは今ありません」ということを伝えたいのです。これは現在完了で一番重要なことが、話題にしている事柄(動作)は過去のこと、しかし「話し手の意識は現在にある」からです。

つまり、

話題にしている事柄(動作)は過去 → カギをなくしたという動作

話し手の意識は現在 → カギは今ないという意識



イラスト図のように、現在完了の文で一番伝えたい部分は今(現在)の意識です。

なくした結果、今の状態はカギがない状態。

だから「カギは今ありません」となり、家に入ることができないイメージが浮かびます。

現在完了の文を理解するには、学校英語で習った訳に表れにくい本当の意味を理解することが重要なのです。

これに対して過去形の文は、

**I lost my keys last month.**

(先月、カギをなくしたんだ)

カギをなくしたという状態は終わった事柄で、話し手の意識の中では「現在」を含んでいません。つまり、過去形からは「今、もう新しいカギを持っている」または、「なくしたカギが見つかった」ことが予想できます。

例えば、先月カギをなくして、今カギを持っていないというのは不自然です。1ヶ月間もホテル住まいというわけにはいきませんよね。

だから、過去形を用いた I lost my keys last month. の文からは、現在、話し手が家の中にも不自然ではありませんね。



イラスト図のように、今、家の中で、先月カギをなくした出来事を誰かに電話で話しているイメージが浮かんでも不自然ではないのです。

I **have lost** my keys. → 今カギがないので、家に入ることができない。

I **lost** my keys last month. → 今はカギがあり、家に入ることができる。

このように「現在完了形」と「過去形」では180度意味が異なる時制であることがわかりますね。

次に上記の現在完了形と過去形を時間軸上でイメージしてみましょう。

## 【現在完了形】

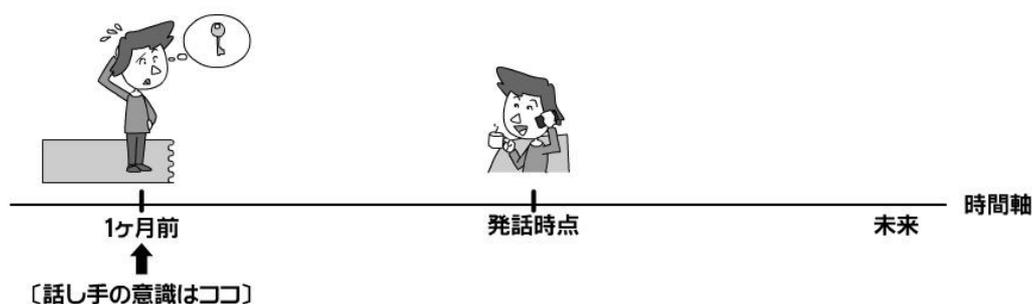
現在完了形とは動作が過去のどこかで完了しているが、その完了した動作の結果が発話時とリンクしている。つまり、話し手の意識は発話時にあるのです。



I **have lost** my keys. という現在完了形はイラスト図(上)のように、have lost 「なくした」という動作は過去のどこかで完了して、「なくした」という動作の結果が発話時とリンクしているイメージ。だから、なくした結果、「今」カギがない状態に話し手の意識があるのです。

## 【過去形】

I **lost** my keys last month. という過去形では、カギをなくしたという状態は終わった事柄で話し手の意識の中では「現在」を含んでいません。話し手の意識はあくまでも過去時。



「なくした」という動作は、このイラスト図のように発話時とは全くリンクしていません。だから、発話時点で家の中にいてもおかしくないのです。過去形と現在完了形は事柄が終わった、という点では両者は共通していますが、過去形には「今」は含まれておらず、現在完了形には「今」が含まれています。

## サンプル2

### 仮定法ってそもそも何なの？

仮定法とは話し手の頭の中に存在する想像の世界の事柄です。下のイラスト図のように私たちの頭の中には「現実世界」と「想像世界」があるのです。仮定法とはこの想像世界での事柄です。

例えば、あなたが大好きな俳優さんとデートしている場面を想像してみてください。きっと楽しそうな光景が浮かんでいることでしょう。もちろん、この光景は現実世界で起きている事柄ではありませんよね。でも、ファンであるあなたは頭の中で自由に描くことができます。しかしこれはあなたの頭の中だけに存在する想像の事柄。つまり、仮定法とはこの想像の世界の事柄なのです。

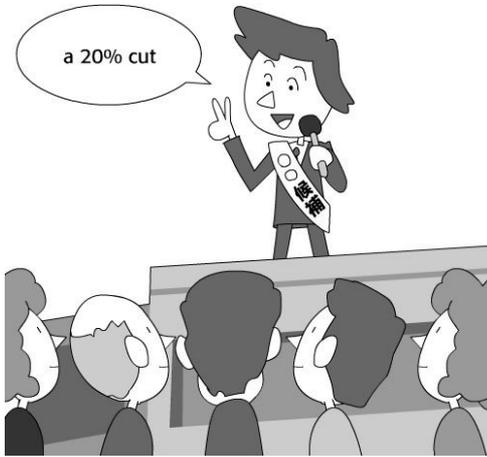
そして現実の世界の事柄と区別をつけるために仮定法では動詞の過去形を借用して表しているだけです。仮定法は動詞の過去形を使いますが、現実世界における時間的過去のことではありません。



イラスト図の頭の中のイメージで、次の例文を比較してみましょう。現実世界の話と想像世界の話です。話し手が異なるのがわかりますか？

If I **become** the prime minister, I **will** make a 20% cut in income taxes.

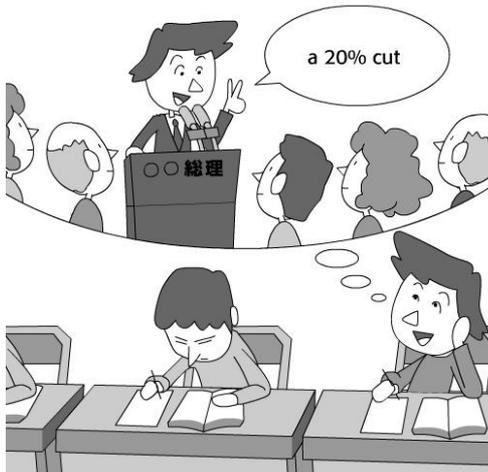
(私が首相になったら、20%の所得税減税をします) [選挙中の候補者の発言]



例文は become (現在形)を使っているので頭の中は現実世界の事柄を伝えています。所得税減税は現実の話。したがって、この文は選挙中の候補者の発言だとわかりますね。

If I **became** the prime minister, I **would** make a 20% cut in income taxes.

([あり得ないと思うけど] 私が首相になったら、20%の所得税減税をします) [高校生の発言]



例文は became (過去形)を借用しているので頭の中は想像世界の事柄です。主節も過去形 would を借用します。例えば、高校生で首相になることが想像の話ならこんな文もごく自然ですね。

簡単に言ってしまうと、現実世界での事柄を伝えるときは、ふつうに現実の時制を用いる。これを「直説法」と呼びます。そして、想像世界の事柄を伝えるときは、過去形や過去完了形を借りて表現する。これを「仮定法」と呼ぶのです。